

〔指導上の留意点〕

○ 点画の丸み、点画の方向や形の変化、点画の連続、点画の省略などといった行書の特徴を理解させる。さらに、毛筆で行書特有の筆脈の連続や運筆のリズムを理解させる。

〔指導のポイント〕

「環」…複雑な右側を整理し、気脈を途絶えさせずに書く。
王（おうへん）の書き方：一画目から三画目まで、筆を紙から離す時間を短くし、「筆脈（ひつみやく）」を意識させます。三画目の横画から四画目の跳ね上げは、右側の「冨」の一画目へ向かうように斜めに力強く運びます。
「冨」の上部（目・口の部分）：画数が多いため、楷書のように一画ずつ止めると重たくなります。中の横画を連続させたり、角を少し丸めたりして、「省略と連続」を表現しましょう。

下部の「衣」に似た部分：左右の払いや点の部分は、バラ

バラに打つのではなく、円を描くような滑らかな動きでつなげます。特に最後の二つの点は、一筆で書くようなリズム（バウンドさせるような感覚）で運ぶと行書らしさが出ます。

全体のバランス：左側の「王」を細めに、右側をどっしりと構えることで、画数の多い字でも窮屈に見えず、安定感が増します。

「境」…偏と旁の響き合いと、最終画の伸びやかさを意識して書く。

土（つちへん）の書き方：二画目の縦画から三画目の跳ね上げまでをスムーズにつなげます。

三画目は、次の「音」の一画目に向けて、鋭く「バトンを渡す」ように跳ね上げるのがポイントです。

「音」の部分：上部の点は、次の横画へと続く「受け」の動きを意識します。中段の「日」の部分は、楷書よりも角を落とし、筆の上下運動を最小限にして、軽く弾むように書き進めます。

「ル（ひとあし）」の部分：左側の払いは短めに止め、右側の長い画へと力を溜めます。

最終画の表現：右下のカーブから最後のはねにかけては、この字で最も目立つ部分です。筆を一度しっかり沈めてから、ゆったりと右上に向かってはね出します。楷書に比べて少し「長く、丸みを帯びたはね」にすることで、行書特有のゆとりが生まれます。

※ 始筆を軽く入るようにすることで行書らしく柔らかみのある線が出る。転折の部分も丸みを帯びるように書くことでより行書らしい作品になる。

毛筆書写は五感を働かせて！

ポイント1・・・鼻で理解（嗅覚） 墨の香りから

ポイント2・・・目で理解（視覚） 字形・中心・方向・長短等

ポイント3・・・感覚で理解（触覚） 筆圧（軽く・しっかり等）

ポイント4・・・耳で確認（聴覚） トン・スー・トン（実際の音はズズズ）

ポイント5・・・書を味わう（心の味覚） 毛筆書写活動への意欲へ



